

第 49 回全国衛生化学技術協議会年会 高松で開催

企画調整主幹付 宮原 誠

11 月 21～22 日香川県高松市で全国衛生化学技術協議会年会が開催された。研究発表に先立ち行われた総会で協議会の会長として挨拶に立った大野泰雄国立衛研所長は東日本大震災への対応もあり、多くの課題を抱える地方衛生であるが、各衛研の真摯かつ適切な取り組みを高く評価した。



総会に参加する大野所長

香川県民ホールにて撮影 2012 年

会場は宇高連絡船などが出入りする玉藻城（高松城）跡に建てられた香川県民ホール（アルファあなぶきホール）の小ホール棟に、全国の衛生試験研究機関の 288 人が集まって開催された。食品、環境・家庭用品、薬事の各部門の一般演題数はそれぞれ 74、37、18 で、合計 129 であった。研究発表の前に例年通り総会が開かれ、本年会を主催した香川県保健環境研究センター長の石川英樹所長はその開催の辞で、“香川で初めて開催される本会において、食品、環境・家庭用品の部門について 1 分間プレゼンという新しい取り組みも入れ、スタッフ全員が緊張して取り組んでいる”などと開催機関としての意気込みを示した。

大野所長は挨拶の中で、“陸前高田市に行ってみましたが、津波で流され、1 年以上たっても、そこには何もありませんでした。一方、衛生研究所には、被災地衛生の問題以外にも、放射性物質に汚染された食品の問題、化粧品中のコムギの水分分解によるアレルギーの問題、残留農薬の問題など対応すべき数多くの難問があります。そのような困難状況にあっても、地方の衛生研究所の対応に不都合があったとの話は全く聞いていません。”と各地方衛研の衛生技術者の健闘ぶりを讃えた。次に香川県知事浜田恵造氏の来賓挨拶では、“環境、食品衛生行政における試験研究機関の役割は重要である”として本会の開催にエールを送っていただいた。その後、議事が行われ、23 年度の事業・会計・同監査結果が報告された。次いで、来年の第 50 回年会を開催する予定の富山県衛生研究所佐多徹太郎所長による招請挨拶がおこなわれ、最後に本協議会副会長の群馬県衛生環境研究所小澤邦壽所長による閉会の挨拶があり、総会は終了した。

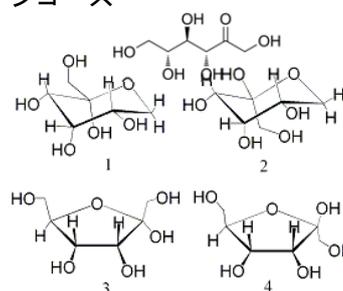
続いて脱法ハーブ、食品添加物公定書改訂についてシンポジウムが行われ、最近の状況が披露された。その後、各演題

の著者による 1 分間プレゼンが 1 時間半に渡り行われ、“短時間に各地衛研の研究を紹介して頂き良かった。”と大野所長は感想を述べた。

特別講演は“かがわ産業支援財団”の谷内田一忠氏による“産学官連携による糖質バイオの研究開発と事業化”であった。当地讃岐は昔から砂糖「和三盆」の名産地として有名であったが、その伝統を受け継ぎ、新たに糖の転化酵素を開発し、希少糖 D-プシコースを量産することに成功した。これを産業化して新たな地域振興に貢献している。“と述べられた。

2 日目は各部門別に示説展示と部門別研究会が行われた。なお、昨年までの“自由集会”は内容が不明朗であるとして、“部門別研究会”と改称された。

D-プシコース



1:α-D-プシコピラノース 2:β-D-プシコピラノース
3:α-D-プシコフラノース,4:β-D-プシコフラノース

天然に殆ど存在しない 35 種の単糖を希少糖と呼び、その一つにプシコースがある。プシコフラニンの配糖体から分離されたのでこの名がある。水溶液中で異性化し、混合物になり、上図の 4 種のうち 3 の α-フラノースが最も多く生成するという。現在、この糖は D-タガトース-3-エピメラーゼの固相法反応で、フルクトースから大量に生産され、その甘味を利用した製品がある。



1 分間プレゼン

香川県民ホールにて撮影 2012 年

会場のホールには演者の座る席が部門と発表番号で指定されていた。発表内容の要約が書かれたシートを香川県の担当者が OHC (Overhead Camera) の下で次々と差し替える中、ポスターの発表者は自分のシートがスクリーンに示されると、その発表内容を 1 分以内に説明した。プレゼン開始の前の会場は 1 分以内に原稿をまとめる演者の姿や会場設営に忙しい係の人々が慌ただしい空気に包まれたが、プレゼンは極めて上手かつスムーズに行われた。